平成29年度　佐賀県立武雄高等学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
高い志と未来を切り拓く力を持ち、地域や国際社会の発展に貢献できる、人間性豊かな人材を育成する	①高い志を抱いた生徒一人ひとりの能力・個性を伸ばし、継続性を持った中高一貫教育の推進 ②基礎から応用までの教科指導の充実や、生徒が深く考える活動を通しての進路目標の実現 ③アクティブ・ラーニングやICT利活用を手段とし、主体的な学習活動ができる授業の推進 ④佐賀を誇りに思う教育やグローバル教育の推進による、地域や国際社会の発展に寄与できる人材の育成 ⑤様々な教育活動や生徒支援による、心身の健康の増進と豊かな心や想像力の育成 ⑥保護者や地域との連携を深め、広く共感と信頼を得られる学校づくりの推進 ⑦教職員の指導力向上、機能的・効率的な学校運営による組織力の強化

達成度　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

3　目標・評価

①高い志を抱いた生徒一人ひとりの能力・個性を伸ばし、継続性を持った中高一貫教育の推進

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題　（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
特定課題	○中高一貫	併設中学校との連携を進める	・中高教師間の連携を深め、教育力を高める。 ・中高生徒間の交流を深め、一体感を持たせる。	・教科別に中高で互いの授業を参観し合い、授業研究会を実施する。 ・高校の教科担当者会議等に中学校職員にも参加してもらう。 ・中高生徒の各種行事・部活動での交流機会を設ける。 ・中高一貫教育の新たなグランドデザインの構築を中高共同で行う。	B	・11月にすべての教科で中高相互の授業参観と授業研究会を行い、中高６年間を通した指導の在り方について話し合った。 ・高校の教科担当者会議に中学校職員に参加してもらい、高校生になってからの様子を知ってもらう機会とした。 ・グランドデザインの構築のために、中学校の探究検討会議に参加したり、高校で作成した案を中学校で検討してもらったり、中高合同で他県の中高一貫校を訪問したりした。	・校地が離れているため、中高の職員の交流がやりにくいということは否めないが、中高一貫教育校を改善するアイディアがある場合には、メールや電話でやり取りをしたり、どちらかの学校に集まったりして検討するということをもっと自由に行うようにしたい。 ・高校１年生の教科担当者会議に中学校職員に参加してもらっているが、年度当初のみになってしまっている。１年間を通して参加してほしい。また、２年生、３年生についても参加してもらえたら中高職員の有効な交流となると思われる。

②基礎から応用までの教科指導の充実や、生徒が深く考える活動を通しての進路目標の実現

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題　（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
特定課題	○進路指導	中高一貫６期生としての自覚と進路第一希望の達成	・一人ひとりの生徒が適切な進路選択ができ、その進路実現のための支援を行う。 ・３年国公立大学合格者150名以上、うち難関大学合格者30名以上、国立大学医学科複数名。	・１年次より教科担当者会議を計画的に行い、３年次の進路検討会へと繋げ、３年間を見通した指導を行う。 ・進路講演会、職員研修会等を行い、生徒の意識向上および職員の授業力向上を図る。 ・文理分け、コース分けのための情報提供を行い、指導・面談の充実を図る。 ・難関大学希望者への個別指導を、早い時期から実施する。 ・短大・専門学校・就職希望者には個別に対応する。	B	・教科担当者会議・進路検討会の資料は、より改善され、会議で活発に検討がなされた。特に、3年生の進路検討会では三者面談への良いアドバイスができた。 ・1・2年の教科担当者会議は、どうしても勤務時間外までかかってしまったが、熱心に検討してもらった。 ・今年度の国公立大学現役合格者は140名と目標を下回ったが、例年レベルの結果ではあった。中期・後期の合格33名と多く、最後まで頑張った生徒が多かった。 ・難関大は九州大11名、大阪大2名、医学科1名と厳しい結果だった。 ・看護・医療系専門学校希望者は、面接・小論文指導を組織的に行い、進路希望をほぼ達成できた。 ・公務員は自衛隊を含め2名、民間企業は1名就職。	・教科担当者会議の内容や方向性は現状でいいと思うが、成績資料についてより見やすく工夫していきたい。 ・中学校から6年間の成績をＧＴＺで比較し、一貫した指導の参考にしたい。 ・各学年とも、成績上位の生徒が少なく、超難関大志望者の育成が必要。 ・国公立大が不合格なら専門学校へという生徒が例年より目立った。浪人してでもチャレンジしようという気概を醸成したい。
教育活動	●学力向上	教職員の指導力向上	・基礎的レベルから応用・発展レベルまで対応できる指導力を身につける。	・大学入試問題研究等の実施によって、より実践的な知識と技能を身につけ、日常の授業への応用を図ることにより、授業内容の改善に取り組む。 ・校外の入試研究会や教科の講習会等に積極的に参加し、入試問題や入試動向等の研究を行う。	B	・「難関大入試研究会」、「入試結果説明会」などに延べ116名が参加。研究会等への参加は例年並みだが、入試改革や各大学の説明会への参加はやや減少。 ・予備校主催の「教員対象セミナー」には、県の研修支援事業で4名が参加。福岡での開催が少なく、参加者は少なかった。 ・大学入試問題研究には、全職員が取り組み、その成果を提出。昨年度より早期に取り組み、その後の指導に活かされた。	・入試改革元年の生徒が入学してくるので、より積極的に情報を収集し、新テストに対応していきたい。 ・入試について大きく変化しているので、各種説明会への積極的な参加を呼びかける。 ・「教員対象セミナー」については、予算措置ができれば、参加者は増えると思われる。 ・超難関大志望生徒への指導方法を確立させたい。 ・大学入試問題研究への取り組み方、内容について更に改善したい。
		生徒の実力養成	・全国模試総合偏差値60以上を各学年120名以上にする。	・学習時間調査、進路希望調査の実施や、「学習と生活の記録」を活用し、生徒の日々の生活状況を把握し、指導に活かす。 ・職員研修の充実による教員の授業力向上を図る。 ・模擬試験を受けて教科担当者会議を実施し、結果の検証、見直し、設定をする。	B	・1月進研模試での偏差値60以上は、1年90名、2年84名と目標には届かなかった。また、3年11月進研では31名と、大きく及ばなかった。 ・「学習と生活の記録」を用いて、生徒の日頃の学習状況を把握し、指導に生かした。 ・毎学期学習時間調査を行った。1日平均で3学期は1年生148分、2年生150分とまだ少ない。3年生2学期は270分だった。	・目標はどうしても高めに設定しているので、厳しい結果になるが、全体的な底上げ、生徒の意識改革が必要。 ・1・2年次の家庭学習時間が少ない。最低180分以上を目標としたい。また、課題などの出し方も各教科・学年でも検討してもらいたい。
		「探究Ⅱ」の工夫と校外体験活動の奨励	・進路達成に資する各学年ごとの「探究Ⅱ」を計画・実行する。 ・年間50件以上の校外活動を紹介・募集し、のべ200人以上の活動体験者を出す。	・探究Ⅱ委員会または企画研修部会で、各学年の探究Ⅱにおける活動内容を検討し、必要な修正を行う。探究活動（協働学習、ディベート、小論文指導等）を充実させる。 ・年間計画を年度当初に示し、以後各学期に募集中の校外活動の案内を適切に行う。また、活動への参加目的が明確になるように参加報告書を書かせ、事前事後指導を行う。校外活動体験発表の場を設け、また文書による報告を行い、経験を共有させる。	B	・適宜「探究Ⅱ」の計画を行い、実行した。 ・クラスの掲示板や廊下の掲示板にポスター・チラシを掲示することで、50件を超える校外活動を紹介・募集した。校外活動体験報告書を提出している数は100を超えている。報告書を提出していない生徒も相当数いることを考慮すると、目標に近い数の生徒が校外活動に参加していると考えられる。	・探究Ⅱの内容について見直す時期が来ている。協働学習やディベートにかける時間が多いのでやり方を工夫して進路学習をこれまでよりも多く入れたい。 ・校外活動に参加する生徒は多いが、そのすべてにおいて報告書を学校に提出するということが徹底できていない。個人で申し込むものについては把握しにくいので、報告書の提出を確実に行うように指導していく必要がある。

③アクティブ・ラーニングやICT利活用を手段とし、主体的な学習活動ができる授業の推進

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題　（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	◎教育の質の向上に向けたＩＣＴ利活用教育の実施	ＩＣＴ利活用教育に対する生徒の満足度を高める（肯定的評価90%以上）。	・電子黒板や学習用ＰＣを全教科で活用し、効果的な授業実践を行う。	・電子黒板や学習用ＰＣの授業における活用状況を調査する。 ・各教科で電子黒板や学習用PCを活用した研究授業を行い、より効果的な活用を検討し実践につなげる。 ・授業以外での学習用ＰＣの活用を推進する。	B	・ＩＣＴの利活用についての生徒の満足度調査では、１年生96.９%、２年生94.３%、３年生87.７%の生徒が満足、もしくは、ほぼ満足という回答であった。 ・電子黒板が３台が故障した（２台は故障したままである）。	・ＩＣＴの利活用について、県内で行われているいろいろな研修会等について、先生方がそれぞれのスキルに合わせて参加ができるように情報提供を図っていく。 ・電子黒板については、県の教育情報化支援室に繰り返し修理を依頼中である。
	○主体的で効果的な学習活動のためのｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞの積極的導入	授業への導入を促進し、かつ、その検証と研究をおこなう。	・個人、グループで考えをまとめさせ、自分の考え方や行動についても考えさせるなどの活動を授業に取り入れる。	・中高合同授業研究会でアクティブラーニングを取り入れた授業の研究を行う。 ・授業アンケートでアクティブラーニングを取り入れた授業の検証を行う。	C	・中高合同授業研究会でアクティブラーニングを取り入れた授業について話し合った。 ・授業アンケートにはアクティブラーニングについての項目を入れていない。	・教科によっては、アクティブラーニングを取り入れることが難しいとする考えもあった。毎回でなくてもペア活動を入れるなどしていけば、その教科を苦手としている生徒もより主体的に授業に取り組み、より深い学びにつながるのではないかと思われる。 ・授業アンケート項目にアクティブラーニングに関する項目を入れる必要がある。
学校運営	○教育情報支援システム（ＳＥＩネット）と学習用ＰＣ導入への対応	教育情報支援システム（ＳＥＩネット）と学習用ＰＣの効果的な活用方法を工夫する。	・ＳＥＩ－Ｎｅｔの効果的な活用法を確立する。	・県教育情報化支援室やＳＥＩ－Ｎｅｔヘルプデスクとの連絡を密にし、業務の実態に合わせた運用方法を検討し、実施する。 ・ＳＥＩ－Ｎｅｔ活用のための職員研修を実施する。	B	・今年度は、出席管理、学校評価アンケートで新たにSEI-Netを活用することができた。また、SEI-Netのアンケート機能については、多くの先生方に活用していただいている。 ・ヘルプデスクと連携を図りながら、先生方のSEI-Netに関する相談等に対応することができた。	・SEI-Netの有効な活用法については、研修会等で情報収集を図りながら提案していく必要がある。 ・SEI-Netに関して、先生方の要望に応えらえれるように、教育情報化推進リーダーが更にスキルの向上を図る必要がある。

④佐賀を誇りに思う教育やグローバル教育の推進による、地域や国際社会の発展に寄与できる人材の育成

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題　（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○佐賀を誇りに思う教育の実践	佐賀の歴史や伝統、産業や技術を尊重しつつ、次世代につながる魅力あるふるさと作りに貢献できる教育の実践	・地域の文化への関心を高める。	・講演会を実施し、佐賀の魅力を再確認することで、他の様々な文化への興味や関心を高める。 ・朝の自習時間を利用し、１年次に書籍「佐賀語り」をとおして佐賀のことを学ぶことで、「ふるさと佐賀」に対して誇りと自信につながる見識を深める。	B	武雄市長による講演で武雄市の未来を考え、佐賀の魅力と発展に貢献する意識の向上を図ることができた。 また、朝の自習時間等で「佐賀語り」を利用し、日頃から「ふるさと佐賀」に対して見識を深めることができた。	佐賀の歴史や伝統、産業や技術を尊重しつつ、次世代につながる魅力あるふるさと作りに貢献できる教育の実践として、身近な方の講演を通して意識向上につなげる。 また、地域のまちづくりに参画する態度を育成することも必要である。
	○更なるグローバル教育の充実	グローバルな視野に立ち、世界で活躍できる人材の育成を目指した教育活動の実践	・生徒のグローバルな視野を広げるような授業や教育活動を実践する。 ・社会課題に対する関心を喚起し、コミュニケーション力や問題解決力を育む教育を実践する。	・国際理解教育講演会を始めとする諸活動の計画、実施を通して、本校独自のグローバル人材像やグローバル教育について職員のコンセンサスを図る。また、それぞれの教員がグローバルな視野に立った授業を心がける。 ・県主催の「世界とつながる青少年交流推進事業」や本校が独自に行う「佐賀大学留学生との国際交流プログラム」を通し、また民間企業の留学などへの積極的な参加を促し、生徒が国際理解を深めることのできる機会を多く提供する。「探究Ⅱ」や日頃の授業を通して自分で問題解決を図る姿勢を身につけさせる。	B	・学問学習会の講師の中に外国人の先生を入れ、海外からの視点を取り入れた話をしてもらった。 ・世界とつながる青少年交流推進事業で８名の生徒を台湾に連れて行ったり、佐賀大学留学生との国際交流プログラムを行ったり、ライオンズクラブの来日生の学校訪問を受け入れたりして、生徒たちのグローバルな視野を広げる機会を提供した。 ・海外研修や海外留学に参加する生徒が20名以上いた。 ・カナダから１年間の留学生を受け入れたことで生徒の国際交流が日常的に可能となっている。	・国際理解教育講演会は、在福岡米国領事館から講師をお招きして実施する予定だったが、当日の台風接近のため中止せざるを得なかった。探究の予定にゆとりをもたせておけば、別日程で実施できたかもしれない。

⑤様々な教育活動や生徒支援による、心身の健康の増進と豊かな心や想像力の育成

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題　（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	○生徒指導	規範意識の向上	・規則の遵守、防犯安全に対する意識を高める。 ・生徒指導措置および交通事故件数の減少に努める。	・ホームルームや集会等を利用して、日頃から道徳やマナー・交通安全・情報モラル・人権意識等についての啓蒙を行う。 ・テキストやプリント・ポスター等により意識づけを行う。	B	・集会等を通して、情報モラル、交通安全を中心に話をして、啓蒙することができた。 ・自転車施錠指導も随時行ったが、不施錠ゼロの日が少なかった。 ・生徒指導措置件数は１学期の２件のみであった。 ・交通事故発生件数は４件で、自転車利用者が２件、保護者の送迎中が２件であった。	・情報モラル教育を中心に、幅広く啓蒙活動に取り組んでいきたい。 ・自転車施錠の習慣化を、日々の指導を通して図りたい。
		部活動の活性化	・部活動を通して、体力・忍耐力・協調性を養い、連帯感を身につける	・他の校務分掌や生徒会等と連携しながら、生徒の能力・適正、興味・関心等に応じた活動を行う。また、家庭や地域社会の教育力や支援をうけながら積極的に活動を展開していく。	B	・部活動では、弓道部、テニス部、少林寺拳法部が県大会優勝を達成した。またその他の部活動もベスト４、ベスト８に多数進出し、成果を十分に発揮した。 ・生徒会活動では薬物乱用防止キャンペーンなどにおいて地域と連携した活動を行った。	・生徒会の各委員会間や各部活動間において、リーダー会議などを実施することにより、連携する活動を活発にしていきたい。
	●心の教育	思いやりの心の育成	・ホームルーム活動や校外活動を通して、他者への思いやりの心を育てる。	・ホームルーム活動の時間に具体的なテーマを設定して考えさせる。 ・校内外におけるボランティア活動やイベント等の個々の活動の意義を明確にし、また関連するさまざまな情報を提供して、生徒の参加意欲を引き出す。 ・「命の大切さを学ぶ教室」を1学期に実施し、命の重みや尊さを学ぶ。 ・心の教育をとおして思いやりの心を育成する。	B	・人権問題などを通して、他者への思いやりの心を培うことができた。 ・今年度は武雄市のまちづくり参画事業に参加し、校内外におけるボランティア活動やイベント等の個々の活動の意義を明確にし、また関連するさまざまな情報を提供して、生徒の参加意欲を引き出すことができた。 ・「命の大切さを学ぶ教室」を1学期に実施し、命の重みや尊さについて意識の向上を図ることができた。 振り返りができておらず、研修や講演の後、自分の考えをまとめ、記録を残す必要がある。	・様々な研修や活動を実践しているが、しっかりと振り返りを行い、生徒自身が必要なことを見出し、社会に貢献できるように意識向上につなげる。 ・ポートフォリオを作ることで、生徒自身が活動してきたことを総合的に踏まえ、自分のすべきことを常に確認できるようにしたい。
		困り感のある生徒への対応	・カウンセラー利用の呼びかけや保健室利用の生徒の把握を行い、早期の対応を行う。	・スクールカウンセリングの活用や教育相談連絡会、特別支援委員会を通して職員間の共通理解を図り、生徒が円滑に学校生活を送ることができるように方策をとる。	A	・カウンセリングを通して、困り感のある生徒の実態把握を早期に行うとともに、カウンセリング記録を関係職員間で共有することで、個別の対応へつなげることができた。 ・教育相談連絡会を実施し、学年で困り感のある生徒の共通理解を行うことができた。	・年度初めや学校祭の時期に困り感を持つ生徒が多くみられたので、その時期に効果的にカウンセリングを行うことができるような日程調整を行う必要がある。 ・教育相談連絡会では、情報共有のみではなく、今後の対応についても協議できるよう、カウンセラーの助言などを取り入れていけるようにしたい。
	●いじめ問題への対応	いじめのない学校づくり	・いじめの発生件数０を目指す。	・学校行事や部活動において、生徒自身が集団との一体感を持てる取り組みを工夫することでいじめのおこらない雰囲気を醸成する。 ・アンケート調査や面談等でいじめの早期発見に心掛け、いじめが認知された時は組織としていじめ問題にすばやく対応する。 ・心の教育をとおして思いやりの心を育成する。	B	・いじめに係る覚知・認知件数は、覚知が４件で、そのうち認知が２件であった。内容はＳＮＳを用いた誹謗中傷、友人間のもつれなどであった。 ・本人や周囲からの聞き取りをはじめ担任、学年主任などと連携した迅速な対応により、問題の早期解決につなげることができた。	・担任をはじめ、教職員の普段からの目配りを心掛け、アンケートや日々の「学習と生活の記録」を活用し、いじめの早期発見及び解決に努める。
	●健康・体つくり	望ましい生活習慣の形成	・校内環境美化に努める。 ・健康診断を有効に活用し、健康な体つくりに努める。	・学校全体でゴミゼロ運動に取り組む。 ・健康診断後の治療勧告書や、保健だよりを通じて、健康な体づくりを目指す啓蒙活動を行う。 ・部活動をとおして心身の健全な発達を促す。	A	・ゴミゼロ運動は推進できた。朝掃除などで掃除の時間を確保してもらい、環境美化に努めることができた。 ・健康診断後の治療勧告や、保健だよりによる健康な体づくりの啓蒙活動もできた。	・掃除用具を充実させ、掃除に取り組みやすい環境を作りたい。 ・健康診断後の結果活用や、保健だよりによる健康な身体作りの啓蒙活動を行う。
		学校保健教育の推進	･保健室での応急措置件数を1，350件以下にする。	・内科的訴えに対応するため、相談時間を確保する。教育相談係を中心にスクールカウンセラーを活用する。 ・「保健だより」を通して、時機に応じた内容の記事を掲載し、啓蒙活動を行う。	B	・保健室での応急措置件数は１月末時点で1,411件であった。昨年度に引き続き増加している。 ・スクールカウンセラー面談を勧奨し、担任の先生方の利用も増えた。スクールカウンセラーに学年の教育相談連絡会に出席していただき、アドバイスを受けた。	・担任や学年との連携を密にし、また、専門機関との連携や、学校全体で組織的な対応ができるよう、今後も生徒とともに先生方に寄り添ったサポート体制を心がけていきたい。
	○図書館教育	望ましい読書習慣の育成	・生徒の読書量と質を向上させ、一人あたりの年間貸出冊数3.6冊以上、貸出総数2,800冊以上を目指す。	・朝の読書、ＬＨＲでの一斉読書、学級文庫の活用等を通して積極的な学校図書館の利用を推進する。 ・「図書館だより」を通して、新着図書、お薦めの本の紹介等の情報発信を積極的に行う。 ・生徒たちの教養や知識の水準を上げるような本の提供を行う。	B	・貸出総数は2,958冊、一人当たりの貸出冊数は3.77冊であった（H30　1月末現在）。朝の読書、LHRでの一斉読書、学級文庫の活用等が功を奏し、目標を達成できた。しかし貸出冊数の個人差が大きいので、全生徒が図書館を利用し本を借りるよう手立てを講じる必要がある。 ・「図書館だより」を9回発行し、情報を周知できた。 ・多数の職員の意見を参考にしながら、良質な本を選書できた。	・図書館利用をより増やすため、教科や学年の意向も考慮しつつ朝の読書の時間を確保し、一斉読書も継続したい。学級文庫の取り組みも続けていきたい。 ・生徒、保護者、職員に図書館の情報を伝え生徒の読書意欲を喚起するため、「図書館だより」はできるだけ多く発行し、今年度同様図書委員にも記事を書かせたい。 ・今後も職員の協力を得ながら、幅広い分野の本を選書したい。

⑥保護者や地域との連携を深め、広く共感と信頼を得られる学校づくりの推進

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題　（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校運営方針	本年度の重点目標の周知	･重点目標を知っている保護者の割合を80%以上にする。	･PTA総会において、学校評価計画を示し、本年度の重点目標について十分な説明を加えることで周知を図る。また、学年保護者会･学年通信･広報紙及び学校のホームページを通して、随時周知を図る。 ･生徒にも重点目標をしっかりと周知し、学校全体で目標達成に向けて取り組む。	B	・知っている、ある程度知っていると答えた保護者がが約５３％で、十分に周知できなかった。ＰＴＡ総会や学年保護者会、ホームページでの広報活動が必要であった。	・ＰＴＡ総会など機会あるときに、重点目標を提示し保護者への周知を図る。
	○開かれた学校づくり	ＰＴＡ総会や学年保護者会の充実	・ＰＴＡ総会への保護者の出席率を６０％以上にする。	・ＰＴＡ総会の案内を一次・二次に分け、早めに案内する。 ・ホームページを利用して事前の広報周知を徹底する。 ・総会資料を事前に配布する。	B	・総会、授業参観、学年保護者会を含めて６０％の出席率を超えており概ね達成できた。また。総会では活発な意見交換もできている。 ・総会時以外の学年保護者会の出席も良好である。 ・大学視察や豚汁会にも多くの保護者に参加していただいた。	・来年度は全国大会が開催されるため、保護者の方の協力をいただく必要がある。早めに情報を流し、できる限り協力していただくようお願いする。
		中学生体験入学の充実	・体験入学の出席者数を募集定員の２００％以上にする。	・早めに計画を立て、中学校に案内を出す。 ・ホームページを利用して事前の広報周知を徹底する。 ・内容を工夫し、中学生の興味関心を高める。	A	・他校との日程調整もでき、参加者２１５名と武雄高校を知っていただく機会を設けることができ、目標をほぼ達成することができた。 ・内容についても、生徒会と協力し、武雄高校の魅力を伝えることができ、体験授業も好評であった。 ・部活動見学では、一部活動していない部の案内ができておらず、直前の確認が必要であった。	・部活動見学では当日の各部の活動・練習試合の状況など把握し活動場所を正確に資料に記載するようにする。
		情報発信の推進	・広報誌「武雄高校だより」を年１２回以上発行する。	・近隣の中学３年生全員の他、教育事務所や教育委員会にも配付する。 ・ホームページを利用して広報を徹底する。 ・在校生だけでなく中学生の興味も引くよう、内容を工夫する。 ・プレスリリースを積極的に行い、対外的な情宣活動に取り組む。	B	・広報誌は12回以上発行できた。 ・今年度は「御船の風」として、広報誌・大会戦績等をまとめた資料を作成し、来校者への説明資料として配布できた。 ・武雄市のまちづくり参画事業や「佐賀を誇りに思う講演会」なども広報できた。	・プレスリリースを積極的に行うとともに、体験入学・高校説明会で学校の様子をよりわかりやすい形で情報提供できるよう工夫が必要である。
			・ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞの更新を頻繁に行う。 ・ｽｸｰﾙNewsを活用する。	・生徒の活動状況だけでなく、保護者向けの文書などもアップする。 ・緊急情報等はWeb配信・メール配信も活用する。	C	・緊急情報等はweb配信・メール配信を活用した。 ・学校ホームページの更新をより頻繁にすべきであった。	・広報活動の一環として更なる活用に努める。 ・緊急情報については今年度同様スクールニュースを利用する。 ・ホームページの更新については、各校務分掌とより連携して、情報発信に努める。
教育活動	○地域との連携	地域との協働活動の推進	・地域の魅力を理解し、地域の将来を考える力をはぐくむ。	・武雄市との連携を深め、地域のリアルな課題をもとに現状を探り、地域の課題解決に向け魅力を活かした将来のプランを創造的に組み立てるように、総合的な学習の時間等を利用する。	B	・武雄市との連携を深め、夏季休業期間中、各グループごとに計画したまちづくりについて実践し、武雄市役所で発表して、地域の課題解決に向け、魅力ある将来のプランを創造的に組み立てることができた。	・総合的な学習を通して、実践できる企画を武雄市と連携し実践できるように早期に検討する。

⑦教職員の指導力向上、機能的･効率的な学校運営による組織力の強化

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題　（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	学問への興味を喚起させ、学力をつける授業の実践	・教科の専門性を高め、奥行きのある授業の実践に努める。 ・指導方法の改善に取り組み、わかりやすい授業の実践に努める。	・県教育委員会主催の「大学受験指導力向上研修会」や「民間教育機関（予備校）への教員派遣事業」などへの積極的な参加を促し、個々の教師の指導力向上を図る。 ・各教科において、電子黒板や学習用ＰＣの効果的な活用をとおして生徒の興味関心を引き出し協働学習やアクティブラーニングにつながる学習活動の工夫を図る。 ・研究授業の実施や参観の機会を増やし、指導方法の改善に役立てる。 ・生徒による授業評価の結果をそれぞれの授業改善に役立てる。	B	・延べ１２０名の職員が、民間教育機関の指導力向上研修や学校訪問、教師派遣事業に参加し、教科指導力、大学受験指導力の向上に励んだ。 ・特に電子黒板の利用については利用数と指導の改善が見られ、ＩＣＴ利活用の主要な部分を占めており、アクティブラーニングや生徒の主体的学習活動との連動も見られているが、学習用ＰＣの利用にはまだ多くの課題を抱えている。 ・研究授業の実施や参観の機会を設けているが、特に中高一貫教育のための授業研究にはまだ改善の余地が残っている。 ・生徒による授業評価の結果を職員に周知し、授業改善に役立てている。	・中高一貫教育の新グランドデザインに沿って、 ①教科指導力向上、 ②ＩＣＴ利活用の推進、 ③主体的学習活動の推進、 の各分野の研究や改善計画を有機的に連動させる。そのために、それぞれの研修や授業参観、指導計画作成において、上記の３項目を必ず取り入れて検証や改善を行うように周知し、中高一貫教育研究会や教科担当者会議で必ず議題として取り上げて改善を進めていく。
	○教育環境の整備	施設・設備の充実、効率的な予算の配置・執行	･安全な学校施設、学業に専念できる学校環境づくりに努める。 ･適正な予算の執行に努める。	･定期的に点検を行い、該当箇所の早期発見に努め対応にあたる。また、情報共有のため職員間での連絡を密にする。 ･本校の長年の懸案事項であった｢南体育館全面改築｣に向けて、早期実現ための要望や協議等を関係機関に働きかけていきたい。 ･厳しい予算配分の中、各事業内容を再点検し有効な予算の執行に努めたい。	B	・学校施設の整備において、安全点検で指摘された箇所や緊急を要する修繕等にも迅速に対応し、生徒の学習環境に影響を与えることなく業務を行うことができた。 ・学校管理運営費予算が厳しい現状のなか、効率的な予算の執行に心がけていたが、今年度は寒気の影響により連日積雪になるなど寒い日が続き、特に光熱水費の予算に関して、夏季・冬季のエアコン使用時の電気量の増加に伴い、生徒や職員に迷惑をかけた。 ・南体育館の改築については、機会あるたびに教育総務課の担当者と話をしてきたが、思うような成果を上げることができなかった。引き続き、要望を重ねて早期に実現できるよう努力していきたい。	・今後も予算が厳しい状況は続くと思うが、節電・節約の意識をもって効率的な予算執行に努めるとともに、生徒や職員へも同様の意識をもってもらえるよう積極的に働きかけていきたい。 ・校舎改築後、２０年が経過し、様々な箇所で修繕等が必要な箇所が増えてきているため、定期的な校内巡視を行いながら、早めの対応を心がけていきたい。

4　本年度のまとめ ・ 次年度の取組

「進路第一希望の達成」、「指導力向上」、「探究活動」、「佐賀を誇りに思う教育の実践」、「生徒生活指導」、「部活動」、「校内美化」、「保健教育」、「図書館教育」、「ＰＴＡ活動」、等においては、達成度としてはおおむね目標通りの活動がなされてきた。「グローバル教育」、「地域との連携」、「校内美化」等については、生徒の自発的・積極的な活動参加により、予想以上の成果をもたらし、学校の活性化に大きく貢献している。生徒と教師の相互理解と協働活動によって、今後もさらに活動の枠を広げていきたい。　一方、「ＩＣＴ利活用における学習用ＰＣの利活用推進」、「中高一貫教育のさらなる推進」、「広報活動の積極的展開」については問題点を抱えているが、解決の方策も具体化してきているので、新年度には早々に反省を生かして展開していかなければならない。

武雄高校創立１１０周年、中高一貫校開設１０周年を控え、現在、武雄青陵中学校と協働して６年間の教育活動のグランドデザインの再構築作業を行っている。新年度当初から新しい方策を軌道に乗せ、教育効果が目に見えて出てくるように職員一丸となって頑張っていきたい。

今年度も多様な悩みや困り感を抱えた生徒が多かった。定期的に開催される教育相談連絡会は、生徒対応において統一した理解と指導方針が共有され、効果的であった。また、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携を積極的に行ってきたが、功を奏した事例の方が多かった。今後も外部との連携を効果的に活用してきたい。

学校教育目標の周知を含めた広報活動については、ＰＴＡ総会や学年保護者会等集会の場だけでなく、学校ホームページやスクールニュースなどＩＣＴ機器の的確な活用により保護者への周知を徹底し、より開かれた学校づくりに取り組んでいきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目